石井勲の漢字教室

4　親こそ最良の教師

II　対談・幼児と漢字をめぐって



漢字は心の珠を磨く道具

対談　井深　大
石井　勲

わが子に教えられて

井深：もう永年のおつき合いですが、どうしてだか、対談に出ていただいたことはなかったんですね。十年ほど前、先生にいただいた名刺の裏には「九・鳥・鳩……」（井深注＝鳩は鳥よりも、鳥は九よりも覚えやすい。これは私たちが幼児指導の実際を通じて発見した新しい真実です……という文）と刷り込んでありましたね。今の名刺にも？

石井：いや、今はもう使っていません。私を非難攻撃していた反対派の人たちでさえ、今では「あたりまえのことだ」と言い出していますから、名刺に刷り込んでおく必要はなくなりました（笑い）。

井深：私、鈴木鎮一先生の運動に興味を持って、音楽だけでなく、他のこともやってみようということで、幼児開発を始めたんですけど、これを、始めるか、始めないか、というころに先生とお会いしてね。石井先生の発言とか、石井先生の運動から、非常にいろんなものを教えられたと思うんです。特

に、私が、生まれた時からのパターン・リコグニション（パターン認識）ということを、強く言い出した一番の大本というのは、どうも、先生の漢字の問題からだと思うんです。先生の漢字教育というのは、パターン認識の能力を現実に示した実験例じゃないかという気がしてるんです。石井先生が、世間から、どちらかというと白眼視されていたのを、「そんなバカなことはない。もっと現実を認識しなければならん」という立場に立ってきましたし、私の幼児教育の開眼に、非常に大きな一つのインパクトを与えてくれた、と私は思っているんです。しかし、石井先生の初めからの運動の経緯という面では、あまり詳しく伺ったことありませんので、どんないとぐちで、どんなきっかけで、どんな風に、何年ぐらいかけて、やって来られたか、ということ、ぜひ一つ、順序立てて伺ってみたいと思いますね。

石井：はい。私がこのことを一番最初に公に発表しましたのは、昭和二十六年の全日本国語教育協議会という、年に一回開催される、小学校から大学までの、国語を専門とする教師の研究会なんです。

井深：ほう、面白い集まりですね。

石井：私は、この年、八王子市の指導主事をしておりまして、その会に出まして発表しました……それがまあ最初だと言ってよいと思います。

井深：そうですか。それまでも、教室を持っておられたんですか。

石井：いえ、それまでは、子供を直接指導するということはしておりません。ただ、指導主事として、小学校や中学校を訪問し、先生方の相談に預っていただけです。そのきっかけというのは、私の長男が、まだ一歳何か月というときに、〝教育〟という漢字を読んだんです。

井深：教育？……ハハハハ。

石井：これには私も驚きました。まだ二歳にもなっていないのですから……。その時、私は『国語教育論』という本を読んでいました。それはちょうど冬で、こたつへ入っていたんですが、たまたま息子がよちよちとやって来て、私の膝に入り込みました。それで、私は読んでいた本を伏せて、こたつの上におきました。すると、その本の書名『国語教育論』の〝教〟を指さして〝キョウ〟と言ったんですねえ。ま、たまたま偶然に当たったんだろうと思いましたら次の〝育〟を指さして、〝イク〟と読んだので、これはもう〝教育〟という字を読んだのに間違いない。と思いました。それで、私はびっくりしまして、家内に「こんな字を教えたのか」と尋ねました。ところが、家内はあっけにとられたような顔をしているんです。そんな漢字など教えるはずがないというわけです。とすると、誰が教えたんだろ

うと、二人で考えました。

井深：うん！

石井：そのうち、家内が「そう言えば、教えてやったことがある」って言い出したんです。家内は、音楽学校出身ですから、毎月、「教育音楽」という雑誌を読んでいました。息子が、その雑誌の表紙を指さして、「これなあに、これなあに」って訊ねるもんで、何気なくそれを読んでやったような記憶があるっていうんです。

井深：ほう……。

石井：家内にはあるかないかの記憶ですが、息子にしては、疑問を持って訊ねて、教えられたことです。僅か一度のその機会で、〝教育音楽〟という文字がその発音と一緒に頭の中に納められたのですね。

井深：うん、パタンとね。

石井：ですから、漢字というものは、見かけによらず、やさしいものかも知れない。私はその時そう思いました。それからもう一つ。息子がそんなことをしている時代、私は、高等学校の教師をしていたんですが、英語も担当しておったんです。英語の学習では、小学校の一年生が初めて習う字でも、大人のものと変わりませんよね。ところが、日本の場合は、まず〝がっこう〟と習って、それに習熟してから、改めて〝学校〟という本字を習う……途中で変更するわけです。

井深：つまり、最初、仮名で習って、それから漢字に移る、ということをおっしゃってるわけですね。

石井：そうです。その〝途中で変更する〟ということが、果たして良いことなのか、どうか考えてみますのに、そういうことをやっている国は、世界広しといえども、わが国だけなんですね。

井深：うん、うん。

石井：この〝途中で変える〟ということは、学習する子供にとっては、大変苦痛なんじゃないか、と考えましてね。それと、息子の経験から、小さな子供がこんなに簡単に覚えられるものなら、最初から漢字で教えた方がいいんじゃないか、という考えを、その時に持ったんです。そうこうするうちに、指導主事になりました。指導主事になって、小学校や中学校へ行ってみますと、一番の問題は、教科書が読めないということです。社会科でも理科でも、一番困るのは〝教科書の漢字が読めない〟ことだっ

たんですねえ。

井深： 小学校、中学校で……。

石井： ええ。中学校の先生は、特に、教科書が読めないことについて、一番頭を悩ましていると、そういうことでございました。それで、いよいよこの漢字教育というのは大変な問題だなあ、ということを感じたわけです。ちょうどそのころ、息子が幼稚園へ通う年ごろになっていました。……一歳数か月で漢字を読んだその時から、やり始めていれば、もっと面白いことになってたかも知れませんが、そのころはまさかそこまでには思い到りませんでしたから……。

井深： あ、そうですか（笑）。

石井： で、幼稚園へ通うようになったところで、漢字を教えてみたんです。そうしますと、一年生が一年間に学習する漢字ぐらい、十日もしないで、みんな覚えてしまいました。それで今度は二年生の漢字を教える……これも一か月もしないで覚えてしまいました。

〝がっこう〟か〝学校〟か

井深： その覚えさせる方法をひとつ、具体的に……。

石井： その方法は、今から考えますと、必ずしもよくないんですよ。

井深： あ、そうでしたか。しかし、実験ですから……。

石井： 小学校の一、二年生が学習する漢字は、基礎的な漢字で、多くは、木とか、山とか、川とかという、象形的なものです。それを元の絵に関連させて教える、ということをやったんです。

井深： あ、象形的にね。

石井： ところが、幼児には、その必要がないのですね。

井深： それは、大人の方には必要なんですね。

石井： そうなんです。大人はそうしないと覚えにくいんですが、幼児にはそうする必要は全くないんです。

井深： あ、それをあとからわかられたんですね。それは非常に貴重なところですからね。パターンということじゃなかったんですね、最初のころは。

石井：そうなんです。今、大人のために『連想式漢字記憶術』という本を出していますが、その〝大人用のやり方〟を、息子にやらせてみたわけです。まあ、それでもとにかくどんどん漢字を覚えて……小学校に入学するころには、もう、五、六年生の本でも読める、というようになっていました。

井深：ほう……。

石井：それと同時に、私が指導に行っている小学校……八王子にはそのころ九つの小学校があったんですが、そのうちの二、三の小学校の一年生担任の先生に、これ、校長の了解を得て「最初から漢字をぶつけてみる」ということを実験してもらったんです。例えば、〝がっこう〟と教えないで、最初から〝学校〟って教えるんです。そういうことを実験してもらって、一年たってその報告を聞きましたところ、「かな書きの場合よりよい」という結果が出たんです。

井深：ええ、ええ。

石井：それで私、これはどうしても自分で実際にやってみたい、という気持が強くなりましたので、昭和二十八年に指導主事をやめて、一年生の担任になりました。

井深：小学校の？

石井：はい。漢字教育は、〝一年生は三十字読める〟ようにするというのが、当時の文部省指導要領に示された目標なんですが、その十倍の三百字くらいをねらってやってみました。そしたら、私のような、小学校教師の経験の全くない、未熟な者でさえ……しかも当時は、二部授業をやっていまして、正規の授業の半分しか出来なかったのに、「学級平均二百二十字読める」というよい結果が出ました。

井深：でも、国語の時間だけでしょう？

石井：はい。勿論そうです。それも、国語の時間は、漢字だけではありません。いろいろ学習することがあります。ただ、「最初から漢字で表記した形で与える」という原則を主にしました。一年生は、いくら漢字が多くても平気なんですね。このクラスを三年間持ちましたが、漢字力は六年生以上になりました。作文を見た六年生の先生が「六年生よりもずっと漢字が多く使われている」と言って驚くほどでした。

井深：それは、初めは、〝読む〟のだけですか。（井深注＝文部省の「読み書き同時教育」に対して、石井方式は「読み書き分離」の〝読み方先習教育〟を主張しています）

石井：読みと書きと一緒にやっていました。

井深： 両方一緒に？

石井： ええ、一緒にやりました。「読み書き分離」という考えが出たのは、それからずっと後なんです。

井深： ああそうですか。はい。

石井： それから、一年生に戻って、今度は指導要領通りのやり方……つまり、最初は仮名で学習させ、あとで漢字を学習させる、というやり方をやってみました。最初仮名で学習した子供たちが、漢字を学習する時、どういう反応を示すか。最初から漢字で学習していた子供たちと、どんなに違った反応を示すか。それを自分の目で直接確かめてみたかったからです。昭和三十一年から三十三年にかけて指導してみてわかったことは、「漢字書きすべき言葉を、先に仮名で学習すると、それが漢字学習の妨げになる」ということでした。昔も今も、小学校の先生がみんな悩んでいることに、こういうことがあります。「漢字を習って、それが書けるようになっても、作文やノートにはなかなか使えるようにならない」ということです。つまり、テストすれば書ける漢字が、作文に、は使われない、ということです。

井深： ああ、そうですか。ほう……。

石井： 「テストすれば書けるのに、作文にはなぜ使わないのか」これは、私が指導主事当時も、よく受けた質問です。

井深： 身についていない、ということでしょうかね。

石井： ええ。まあ、そういうことになりますが、それは〝反復練習〟の不足に原因するものではないんです。ところが、「それは、まだよく身についていないためだから、もっと練習しなさい」ってなことを言って済ましているんですね。

井深： はーん。

石井： ところが、そうじゃないんですね。先に仮名書きで学習させますと、それがその言葉のパターンになって頭の中に納まってしまいますから、あとで学習した漢字は、身につかないんです。また、仮名のパターンをこわして漢字に置き換えることは、最初から漢字を学習するのに比べてなかなかむずかしいことなんです。

井深： 歩くことがちゃんと出来るようになったら、スケートはむずかしい。（井深注＝アメリカの心理学者マグロウの実験によると、まだ、よく歩けない幼児に、歩く練習と同時に、ローラースケートで



滑る練習をさせると、歩くことと滑ることとが相互に影響し合って、どちらも上達する。ところが、歩けるようになってから滑る練習をさせると、歩けるようになったことが、滑ることの練習の妨げになって上達しなかった、と言う）

石井：そうです。そういうことなんです。

井深：歩くことと、スケートと、同時にやりゃあ、どっちも身につくんですがね。

石井：ええ、ええ。私、そのマグロウの実験を知った時に、これは私の主張（言葉と漢字とを一緒に学習させるという）の理論的な裏づけに役立つなあ、と思いました。

井深：今われわれが言っている「日本語が定着しちゃったら、外国語は遅すぎる」んだという……それと全く軌を同じくしますね。

石井：そうなんです。日本の教育というのは、明治以来、仮名で読み書きするという習慣をまずつけてしまうことなんです。そうすると、その学習に成功すればするほど、漢字学習は困難なものになるんです。

井深：〝難しさ〟の意味というものが、大人なりの解釈で扱われていて、子供にとって、何が難しいか、迷惑か、ということは、ひとつも考えていない（笑）。

石井：ええ、そうなんです。

井深：仮名が定着しちゃうと、後から漢字を入れても、漢字に対する抵抗力ができちゃう、とそういう言い方をしてもいいですね。初めから漢字をやって、仮名なんかひとりでに覚えるんだ、と放っておいたっていいんだ。漢字の方がノルマルなんだ。ということになっておけば一生懸命字を覚えるようになる、と。

石井：ええ。ですから、最初に社会の標準的なものを教える、ということですね。どこの学校だって、〝がっこう〟なんていう看板を掲げてる所はありませんよ（笑）。にもかかわらず〝がっこう〟という書き方を教えているというのは、私、大変な間違いだと思うんです。私はそのことを、実際の指導

によって確かめた、ということなんですよ。

三歳ぐらいからが適当

井深：覚える、覚えないということ以前に、それが身につくことになるか、ならないか、という問題があるわけですね。

石井：そうなんです。ですから、明治以来の、「仮名を学び終えてから漢字へ」というやり方は、絶対に変えなきゃいけない、というのが、それ以後の私の主張の、一番重要なポイントになってきたわけなんです。私の教えた……初めから漢字で覚えた子供たちは、〝学校〟という言葉は、漢字で書かなきゃならないものだと思っています。だから、それが書けないからと言って、〝がっこう〟とは書きません。調べるか、教わるかして、必ず〝学校〟と書きます。だから、必ず書けるようになります。ところが、仮名から先に習った子供は、仮名が身についてしまっていますから……。

井深：とにかくイージーに書きたくなる、おっくうになるんですよね。

石井：ええ、おっくうになるんです。ですから、書けるのに書かない。書かないから、書く能力は育たないどころか、衰えていく。これなんですよ、明治以来の漢字教育の問題点は。

井深：うん、うん。重要なポイントですね。

石井：そのことを、私は、昭和二十八年からの三年間の実験と、三十一年からの二年間の実験によって、確認したわけです。それをまとめたのが、『私の漢字教室』（黎明書房発行）という本です。これは三十六年に出しました。しかし、これが刊行されても、世の中に広く実施させるような影響力はありませんでした。たまたま、ある教育委員会の委員長がこの本を読んで共鳴し、同じく共鳴した校長に奨めて、学校職員が一丸となって実践した例があります。それは、新潟県の亀田東小学校という学校です。これは、五年間、学校を挙げてこの教育を実践し、すばらしい成績を上げてくれました。この学校は、その後間もなく他校と合併され、今はありません。

井深：ほう……それは惜しいですね。

石井：次に、熱海市立桃山小学校。これは熱海市の教育長が支持してくれまして、校長が熱心にこの教育を推進してくれました。それから、富士市立須津小学校。これも三代にわたる校長がいずれも熱心にこの教育を推進してくれました。現在（昭和五十一年）は、弘前市立船沢小学校があるだけです。

校長の花田先生が熱心で、実践されて七年めになります。公立の学校では、三十六年以降十五年にもなるのに、この四校だけしかありません。

井深：その間、文部省の態度とか、一般の教育界の受けとめ方というのは、どうだったんですか。

石井：いやもうひどいもので、冷淡などというものを通り越して、大変な迫害を受けました。また、この教育を実践したということで、大変な迫害を受けた先生も何人かいらっしゃいます……。思えば、私も随分いやな目にあいました。

井深：そうですか。例えば？……

石井：私より年下の女の先生を学年主任にして、その下におくなど。また、漢字教育の発表会をしようと思っても反対する。強いてやろうとすると、他の教師に協力させないようにして妨害する。それで、昭和四十二年三月、辞表を出した上で、最後の公開授業を、学年末休業中に行いました。

井深：ああ、そうですか。

石井：父母たちは、十四年間、いつでも私を支持してくれました。校長が何と言おうと、誰が何と非難しようと、強く支持してくれました。それが何よりの支えになりました。それで、私も、十四年間、小学校でこの実験的な指導を続けて来られたのだと思います。最後の公開授業の時も、先生は一人も手伝いに来てくれませんでしたが、父母たちが、会場の設営から受付け、案内の仕事まで、総出で手伝ってくれまして、大々的な発表会になりました。

井深：幼児開発協会を作ったのが、そのころだなあ。

石井：ああ、そうでしたね。昭和四十二年三月、小学校をやめて、大東文化大学の講師になり、この教育の普及活動に専念しようとしている時に、幼児開発の動きがあって、まあ、やらせていただくようになったわけです。

井深：幼稚園で、先生のメソード（方式）を取り上げたところはありませんでしたか。

石井：それが、その年の十二月、大阪の小路幼稚園の井上園長から電話が掛りまして、「私は先生の著書を読んだが、ぜひお目にかかりたい」と言うんです。私が「いつでも会います」と答えますと、「では、これからすぐ参ります」って言うんですね。私は驚きました。「おや東京にいらっしゃっているんですか」と言いますと、「いえ。今はまだ大阪の自宅ですが、お会いできるなら、すぐに参ります」って……。

井深： ハハハハ。へえーえ。

石井： 電話があってから、三時間ほどで、ほんとにやって来ました。タクシー、飛行機、タクシーと乗り継いでやって来たのです。一時間ばかり話し合った後、井上先生曰く、「先生のやってることは、小学校じゃ広まりません。幼稚園です。私にお任せ下さい」って……。

井深： うん、うん。なかなかこれは……。

石井： 実を言いますと、私は小学校に広めることばかり考えていて、幼稚園のことは少しも考えていなかったんです。

井深： 息子さんの御経験からしても、それはちょっと手抜かりでしたな（笑）。

石井： ええ。今から考えると、当然、それ考えなくちゃならないはずだったのに。でも幼稚園に普及させるということは全く考えていなかったのです。どこまでも、小学校の教育の改革ということで。

井深： 公立学校の指導主事だったからでしょう。

石井： やっぱり垂直思考なんですね。水平思考はなかなか……、ハハハハ。井上園長に言われてみますと、小学校で一番よく漢字を覚えるのが一年生なら、幼稚園だって五、六年生以上に覚えるはずだって、すぐ思いました。自分の子供の経験があっても、それには重きを置いていなかったんですね。

井深： 偶発したことだ、という風にね。

石井： ええ、そういう風にとっていましたね。もっと沢山の実例を持っていたら、気が付いたと思いますけど。……ところで、井上先生を初め、いくつかの幼稚園で実際にやってみますと、この年は年長児（五歳）にやったのですが、小学校の一年生よりもむしろよく覚えるのではないか、という期待以上の好結果が出ました。それで、その翌年に、これを年少児（四歳）におろしてみたんです。すると、「年少児は年長児に決して劣らない」という結果が出ました。

井深： そうですか。

石井： それで、その次の年には〝三歳児〟に……という具合に、年ごとに下の年齢におりていき、結局、二歳児を預っている保育園では、二歳児でも大丈夫……。

井深： 入れる、ということですね。

石井： はい。

井深： 入れる、入れない、というのが問題ですよね。

石井：今では、実験的には、生後八か月から漢字を覚えることができる、ということがわかりました。

井深：ほう……八か月で？

石井：これは、又吉さんという、沖縄で私のメソードを熱心に実践してくれている方ですが、この方が自分のお子さんにやってみて、八か月から半年の間に、漢字を二百字覚えた……。

井深：二百字！

石井：その上、英語の単語を二百語……。みんな読めるようになりました。そういう実験をやってくれました。最初のうちは、手ごたえもないようですが、いったん呑み込むようになると、あとはぐんぐん覚えるようですね。

井深：筋道さえつけば、覚えるんだなあ。

石井：この間、私、大阪のある保育園に講演に行きまして、その翌日、「やっぱり先生のおっしゃる通りでした」と園長さんから言われました。というのは、お孫さんに小学校二年生と四歳の子供がいて、同じ漢字を一緒に教えてやって翌朝試してみたところ、全部覚えて読めたのは四歳の子供で、二年生の子供は忘れてしまっていたというのです。四歳と七歳とではそれだけ違うんです。今の学校教育で、五、六年生や中学生になって書き取りをやらせていますが、これは実に馬鹿馬鹿しい話ですよ。

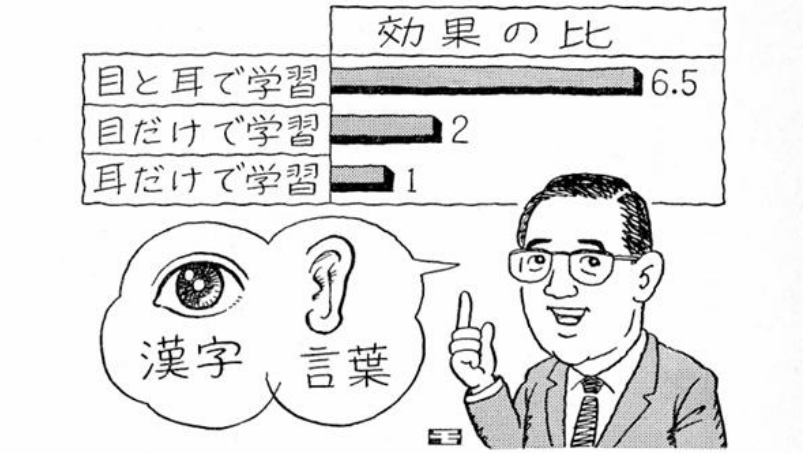
井深：韓国の金雄鎔という子供ね、あれだって特別のことじゃないんですよね。

石井：そう思います。あれがやはり生後八か月の時から漢字を覚え始めました。たまたま漢字を読むのを発見したというのが……。

井深：きっかけですか。

石井：韓国の将棋の駒には〝車〟というのがあって、向こうでは〝チャ〟と発音するんだそうです。雄鎔君がこの駒を持って「チャ、チャ」と言っているのを母親が見て、これは漢字を読んでいるのかも知れないと思い、試みに他の漢字を教えてみた、というのがそのきっかけです。結局、三歳になったころには、どんな本でも、ほとんど読めるようになっていた、ということです。でも、私は、現在のところ、三歳ごろから始めるのがいいんじゃないか、と思っています。

井深：いつ、どういう風に、という点を詰めていくのが、早期教育のなかなか簡単にはいかない問題ですよね。



目と耳と一緒に

石井：さっき、歩くことと滑ることを同時に練習させる話が出ましたけど、私は、言葉と漢字とを一緒に覚えさせるのがよい、と考えています。元来、文字というものは、耳で聞く言葉を目でとらえるようにしたものです。だから、耳で聞く言葉と目で見る言葉と文字とを、同時に……

井深：うん、うん。

石井：同時に学習させるのが、記憶を深める道理です。これは、日本生産性本部から刊行されたものにあった記事で、アメリカの実験なんだそうですが……、耳だけである知識を……。

井深：学習する……。

石井：ええ、耳だけで学習するのと、今度は、目だけで学習するのと、もう一つ、目と耳の……。

井深：両方をね。

石井：ええ、両方から学習するのと、この三つの学習効果を比較してみますと、一対二対六・五という結果が出たんだそうです。

井深：ほう。

石井：ですから、幼稚園の先生たちには、このことを特に強調することにしてるんです。と言うのは、幼稚園の先生たちは、ほとんど幼児の耳に訴えているだけなんですね。例えば、「手を洗う」という生活指導の際には、「こういう時には手を洗いましょうね」と言葉で幼児の耳に訴えるわけです。それに対して、私は、「手を洗う」と黒板に書いて、その上で「手を洗う」ことの大切な話を聞かせなさい、と言うんです。そうすれば、「手を洗う」という字を覚えるでしょう。それと同時に、その大切なことを、より一層理解し記憶して、それを生活の上に生かす、ということなんです。

井深：字を覚えたり、事柄を覚えるだけじゃなしに、日常行動に反映してきますね。

石井：そうなんです。漢字教育の先の方に、生活指導や対人関係を良くする教育、道徳教育なんか

があるんですよ。

井深： その上に、思考力とか、集中力とかいう、一般的な能力もつい てくる……。

石井： そうなんです。漢字教育は、漢字を覚えることも重要ですが、それよりも、そういう能力がついてくることの方が重要だ、と言ってるんです。ところが、漢字教育反対論者は、単に漢字だけの範囲でしか考えようとしないんです。

井深： つまり、漢字がいろんなことの牽引車になる……。

石井： ええ。その事実が重要なんです。ここがわかる園長さんは、たいてい実践してくれます。情操教育が重要だと言って、絵を描いたり、歌を歌ったりさせて、これが情操教育だと思っている幼稚園が多いのですが、漢字は微妙、繊細な心の働きを表わすために生まれたものです。だから、漢字を教えることはそのまま情操教育になるわけで、岡潔先生も「漢字は心の珠を磨く道具である」とおっしゃっているほどです。さらに、漢字を知れば、自然と読書するようになりますが、読書は、絵を描いたり歌を歌ったりするよりも、深い情操を育ててくれます。

井深： 漫画じゃなしに、れっきとした本が読めるということが当たり前のことだという、そういう筋道をつけちゃう、ということなんですよね。重要なことは、漢字教育は、単に国語だけの問題じゃない。人間づくりとして、文化的な指向を与える、とそういう意味ですよね。

石井： 私が指導主事をしていたころ、教育学者たちが「漢字は国語学習の上で大変な負担になっている。だから、わが国では、国語に他教科の学習時間を食われている」と言っていたものです。

井深： 日本では、漢字を覚えるのに手間がかかる、と……。

石井： ええ。それで、私、外国ではどんなに国語の時間が少ないのかと思って、調べてみました。そうしたら、外国の方がどこもずっと多くて、たいてい、わが国の二倍くらいやっているんです。

井深： 母国語教育の時間ですか。

石井： そうです。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、ソ連、どこでも国語の時間がわが国の二倍以上です。例えば、ドイツでは、三年生は一週間に二十四時間の授業時数がありますが、そのうちの十四時間が国語なんです。

井深： ほう。

石井： 毎日、二時間から三時間、国語の学習をしている、ということですよね。結局、国語学習を

うんと進めておかないことには……。

井深：どんな学習だって進められないですからね。どんな学科だって、字で表わさないものはないですからね。ああ、そりゃ面白いな。

石井：ドイツでは、理科や社会科の学習が、四年生になるまでは一時間もないんですよ。

井深：ほう……向こうではねえ。

石井：ええ。しかも、四年生でやる理科や社会科の時間数は、決して日本より多くありません。やはり、国語の時間数が一番多いからです。国語力が強くなれば、理解力、吸収力が強くなりますから、理科や社会科の時間数は少なくてもいいんでしょうね。

井深：日本では、国語が基礎的な手段というよりも、国語イコール文学みたいな考え方だから。

石井：文学鑑賞がいけないとは申しませんが、もっと理科的、社会科的内容の文章を理解する力を養うことの方が大切だと思います。算数の文章題が解けないというのは……。

井深：ああ、応用問題のことを〝文章題〟って言うの、今は。ハハハハ……。

石井：算数力の不足ではなくて、国語力の不足なんです。文章が読解できないんです。何を問われているかがわからないんです。

井深：算数の問題というより、その前の国語の問題なんだな。

石井：そうなんですよ。ところで、最近、都内の小学校で、ある女の先生が……その先生は私の所の講習会に四年も連続して出席し、徹底的に研究された先生ですが、ぜひ石井方式漢字教育を実践したいと言って始められたんです。今、一年生は漢字を七十六字学習することになっているんですが、この先生は、一年生に五百字の漢字を学習させたんです。一年たって、他の先生たちが皆言うそうです。「あの先生のクラスの子供は、朝礼で並んでいる所を一目見ればすぐわかる。一年生が四クラスあるが、見分けがつく」って。

井深：ほう！それは鈴木チルドレンの場合もそうですねえ。キチッとしてる。

石井：ええ。きちっと整列していて、目が生き生きとしていますって。ぱっと一目見ただけでわかるそうです。

井深：結局、集中力とか、そういうものができるんだな。いや、大切なことですね。

（「幼児開発」昭和五十一年十二月号）